

氏名	みぞ かん しみん いち 溝 上 慎 一
学位の種類	博士 (教育学)
学位記番号	論教博第 107 号
学位授与の日付	平成 15 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相 ——青年の内在的視点と固有の文脈を考慮して——

論文調査委員 (主査) 教授 山田 洋子 教授 田中 毎実 助教授 遠藤 利彦

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、後期青年に焦点を当てて、青年の「自己感情 (self-feeling)」とそれを規定している「自己の諸相 (aspects of the self)」について「青年の内在的視点」と「固有の文脈」という観点から検討したものであり、次の 6 章からなる。

第 1 章では、自己という観点から青年の内面世界を見ようとする際に、これまでの関連研究を概観すると、そこには大きく 2 つの問題点のあることが指摘された。1 つは、文脈の世界が欠けていたことである。そこで、後期青年、とりわけ大学生を調査対象とした本研究では、「大学生固有の文脈」をいかに踏まえて青年の内面世界を明らかにするかが課題の 1 つとなった。もう 1 つは、青年の内面世界を自己という観点から測定していく際に直面せざるをえない幾つかの方法論的な問題点である。これについてはそれぞれに解決の道が検討された。

第 2 章では、これまでの自己研究において未整理なままに混乱をひきおこしている自己関連用語の概念的な整理がなされた。さらに本研究の依拠する自己論として、Hermans の「対話的自己論 (the dialogical self)」が紹介された。

第 3 章では、青年の自己感情の様相を明らかにするために、これまでの自己評価測定の問題点を克服しつつ、新たな自己評価尺度が作成され検討された。尺度作成にあたっては、(1) 全体的自己 (global self)、(2) 肯定性-否定性次元、(3) 社会-個人基準が考慮された。さらに各下位尺度の組み合わせからなる自己評価タイプ 7 つについて、YG 性格検査の下位尺度 (抑うつ性 (D) や劣等感 (I) など) と適応意識 (人生に満足や生活に充実など) との関係が検討された。その結果、もっとも肯定的な性格特徴および適応意識を示す自己評価タイプは、SS1 (高高低低) であり、もっとも否定的な性格特徴および適応意識を示す自己評価タイプは SS16 (低低高高) であることが明らかにされた。このような自己評価尺度、それによって作成された自己評価タイプなどを用いて、青年の自己感情の様相が、大学の学年別・男女別・全体に分けて検討された。

第 4 章では、自己評価を規定する自己の諸相を表出させるために、「WHY 答法 (WHY is it test)」技法として開発され、この技法による検討がなされた。WHY 答法で表出される記述の上位次元カテゴリーとして「自己」「他者との関わり」「人生」「生活」が設けられ、次いで、4 つの上位次元カテゴリーのいずれかに下位として属するように「自己の特徴」や「人間関係」「家族」「日々の生活」などの下位次元カテゴリーが割り振られた。こうして作成された上位次元-下位次元カテゴリーを用いて、青年の自己評価を規定する自己の特徴が明らかにされた。分析の結果、(1) 青年の自己評価の高さを規定する自己は「日々の生活」として描かれ、逆に、自己評価の低さを規定する自己は「自己の特徴」として描かれることがわかった。また自己評価の高さを規定する自己が、自己評価の低さを規定する自己の裏返しとは必ずしも限らないことがわかった。(2) 上位次元カテゴリー「他者との関わり」の内容が、自己評価の高い者にとっては「人間関係」を意味するのに対し、自己評価の低い者にとっては他者との関係から生起する他者に対する自己態度、すなわち「他者への態度」であることがわかった。(3) 本研究の主要な対象は青年期後期にある大学生であるが、彼らの「重要な自己」に、時間軸を内包する「人生」のカテゴリーはあまり多くは見られなかった。この特徴は、徹底的な記述を求めたインタビュー調査によって

も同様に確認された。また、自己評価の高いとも低いともいえない自己評価の中間群は、表向きは自己評価の低い者の特徴をベースとした否定的な様相を示しているが、その実、肯定的な生活感情に支えられていることがわかった。

第5章では、自己感情と自己の諸相を編み込む大学生固有の文脈に迫るために、Hermansらの対話的自己 (the dialogical self) 論が援用されて、結合に意味をみだす「ポジション分析」が展開された。これによって第4章の分析が再分析され、その結果、大学生の自己評価を規定する自己の諸相を支えている大学生固有の文脈は、自己評価高群、低群ともに、「大学受験」「学業」「クラブ・サークル活動」「アルバイト」「就職あるいは大学院進学」であることがわかった。なかでも、「学業」は、評価高群、低群ともに、もっとも出現率が高く、大学生の自己評価を規定するきわめて重要な文脈であることが明らかにされた。また、(大学生の自己評価を大きく規定するとされた) 自己評価高群における「日々の生活 (Y)」, および自己評価低群における「自己の特徴 (N)」が、大学生の入り口、出口である「大学受験」「就職あるいは大学院進学」とあまり関わらないことも明らかにされた。しかし、「過去」や「未来」が自己評価を規定する場合には、その評価に入り口と出口の文脈が深く関わる。大学生の場合、過去と未来の文脈は、多くの場合、大学受験、就職、大学院進学に関わる。これらの結果は、文脈を意識化しなかった第4章での分析結果が、実際にはいかに大学生固有の文脈に支配されているのかを示すものである。

第6章では本研究のまとめと今後の問題が検討された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、青年後期に焦点を当てて、「青年の内在的視点」と「固有の文脈」を重視して、青年の「自己感情 (self-feeling)」とそれを規定する「自己の諸相 (aspects of the self)」について検討したものである。本研究では、とくに以下の点から高く評価できる。

第一に、青年期研究に「文脈」という視点を導入したことがあげられる。青年期は時代の産物である。したがって、一般的な青年把握にみられる疾風怒濤やアイデンティティの危機などの用語も、社会・歴史的な文脈から検討されねばならない。たとえば、Hallの前提とする19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会と、Spranger, Bühlerなどに代表される1920年代ドイツ語圏青年心理学者の前提とする社会では、それぞれに異なった含意をもつことになる。この社会・歴史的な文脈や、現代青年の生きる現場という日常の文脈を無視して、青年の内面世界を解明しようとするならば、自ずと無理が生ずる。このような問題点を十分に自覚しつつなされた本研究は、「大学生固有の文脈」を踏まえ、青年の「内在的視点」から内面世界を明らかにした。この問題意識は、従来の研究に対して重要な修正を加えるものである。

第二に、方法論的な貢献があげられる。本研究では、従来のオーソドックスな尺度構成に基づいて「自己評価」尺度を構成しながら、さらに「WHY答法」や「ポジション分析」など、新しい試みが意欲的に導入されている。こうした多様な方法論を用いて多角的に後期青年の感情や自己評価がなされている。この方法論的な前進もまた、高く評価される。

方法論としてはまず、これまでの自己評価測定の問題点を克服しつつ青年の自己感情の様相を明らかにするために、新たな自己評価尺度が作成され、各下位尺度の組み合わせからなる自己評価タイプが設定され、これらをもとに広範囲な検討がなされた。

次に、自己評価を規定する自己の諸相を表出させる技法として「WHY答法 (WHY is it test)」が開発され、これによる検討がなされた。これによれば、自己評価の高い青年は「日々の生活」、自己評価の低い青年は「自己の特徴」を重視した。「他者との関わり」も重視されたが、その具体的内容は、自己評価の高い者では「人間関係」であり、自己評価の低い者では「他者に対する自己の態度」であった。これらは興味深い結果である。

さらに方法論的に見てもっとも新しい試みは、文脈に配慮した「ポジション分析」である。これによって、「WHY答法」による分析結果の再分析が試みられた。

第三に、Hermansらの対話的自己 (the dialogical self) 理論を導入し、この新たな理論的枠組みを用いて「大学生固有の文脈」を把握しようという試みがあげられる。意味構造にかかわる質的分析を重視するこの新たな方法論は、今後の研究のために新しい方向性を力強く指し示すものとして、高く評価できる。

「ポジション (position)」や「声 (voice)」という概念ツールを用いる対話的自己論は、自他の分別を文脈としてもつ一

個の生の経験体を「自己 (self)」と措定し、この自己の世界に、さまざまな「私」「他者」「モノ」が、主体とも客体ともなって存在していることを、理論的図式的に示す。これによって、ただたんに行為主体を「自我 (ego)」,あるいは (Meadのように)「私 (I)」としてのみ表現してきたこれまでの自己論は、複数の行為主体を「自己 (self)」の中に「私 (Is)」として併せ持つ自己論へと、生産的に展開されることとなった。

本研究では、「学業」が大学生の自己感情を大きく規定する大学生固有の文脈であることが示された。しかしこれは、学業を大学生や青年の自己感情を高める要因と見なすような従来の考え方とは異なっている。学業は、大学生固有の文脈や青年の内的視点からみた自己の世界で構造化され、意味を生成している。この意味構造が追求されているのである。このような筆者の視点は、相関分析や要因分析という方法論をとってきた従来の心理学の考え方や方法論に対する批判にとどまらず、理論的にも方法論的にも新たな研究方向をうちだす重要な示唆を含んでいる。

とはいえ本研究にも、問題がないわけではない。「内在的視点」「大学生固有」「文脈」「意味構造」「意味構築」など重要な理論的用語について定義があいまいであり、その内容を一層吟味することが求められた。また、方法論についての議論がきわめて生産的であるのに比べて、「青年」研究なのか「大学生」研究なのかといった研究対象についての議論は不十分であるとも指摘された。「大学生固有の文脈」を研究対象にするのであれば、「高校生」や「勤労青年」との比較も問題である。しかし、これらの疑問は本論文が提示した学術研究の価値を損なうものではなく、今後の研究のなかで発展させていくことが期待されるものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年4月17日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。